随筆

お墓（蔵）三題

南山病院医員
伊地　柴敏

七十才を期にこれまで三十八年余の診療所の経営を閉じて勤務医に転向することになりました。

急性疾病のみにこだわり慢性疾病、介護医療をおろそかにした酬（むく）いが閉業の原因であります。自分自身の怠慢な性格が日進月歩の医学の時代の波にすっかり乗り遅れることになり営業不振が致命傷となりました。

七十路という時期は人生の総仕上げをする第四コーナーとなって矢鱈と自分の遺り残した物事が多いことに気付きます。その残務整理なるものが次々と出て来るものです。

これまでの生き方を振り返れば仕事のこと、子育て、孫育てと日頃は追いまくられ、先の事を考える余裕はありませんでした。七十になって始めて心の隅にのしかかるものに気付きました。吾が家の墓のことでした。

父母が戦後いち早く親族で共同墓地を購入して当時無けなしの大金を叩（はた）いて苦心惨胆造り上げた代物で、前面は堂々として威厳もありました。しかし側面、袖といわれる部分はすっかり地盤沈下が酷（ひど）く雑草、雑木、ススキが根を張りくずれ落ちんばかり、清明際、お盆の時は草刈、雑木の根の掘り出しがいつも苦痛で難儀なことです。その都度簡単な補修だけでもと思うのですがいつも済んでしまえばそのまま放置という連続でした。

その頃墓地内の一族の墓も同様に老朽化して破損がひどくなり、傾斜しているのも有って改修の時期にあったのです。そこで親族八ヶ所の墓主が相談し同時に改築したいとの意向感触を得ましたので私はこの工事のまとめ役を引き受ける羽目になりました。この機会を逃すと一人一人でこの工事をするのも至極大変な難事になることを考えると難儀は承知の上でこの人達と行動を共にしてそのリーダー役、まとめ役目を果たしました。そして吾が家の墓は和琉混合折衷の総み影石で長年の夢であった墳墓を完成させました。これで第一題関門を突破したことになります。

次は成功に勢いを得たという事でしょうか。その頃は私の生涯奉仕事業の主柱であります大学の献体組織で計画を進めていた組織入会員勧誘促進運動の為の「献体成願者の刻銘碑」の建立に全力を傾注することが出来ました。この仕事はなかなかややこしく賛同意見の多い中での反対意見も多く多様多岐に亘り役員の中でも反対者を出す仕末。何事をするにしても必ず反対者が出現します。この人達をまとめるのに四苦八苦異論反論の噴出、その反論の理由は募金運動をさせられる事が嫌いで、いやで恐ろしいと言うだけのことでありました。困りました。そこで私は全ての責任を負うということで募金の目標を医師会、歯科医師会と全医療関係機関にしぼって行うという事でこの異論者を説得して納得させました。

沖縄県医師会及び歯科医師会、その他全医療機関の皆様方には本当にお世話になりました。そのご協力ご支援は誠に有難く感謝に絶えません。厚くお礼を申し上げます。

この様な経過を経てやっとの思いで異論反論を取りまとめて発案以来三年の日時を要して碑の建立をすることが出来ました。出来上ってしまえば今の今まで反対していた人達も掌を返す如く笑顔になって「造って良かったですね」と言う。

募金運動と言うものは嫌がられるもので、つらく厳しく怖いもので最も謙虚でなければならないものだと思います。二度とこの様な事には関わり度くないと思ったものです。

現在七○○余名の献体成願者が医学部構内の御苑に建つみ影石板に刻銘され永遠の安息の眠りについています。（県平和祈念公園の刻銘碑を模して建立しました。）これで第２題の関門

を通ったことになります。

しかしこれで終りではありませんでした。それから三年もしないのに又々頭の中に鎌首をもたげて来るものに気付きます。そして又その中に深入りする羽目になりました。それは一族の氏墓（門中墓又は宗墓の事）の事が気になって仕方ありません、それは中城村の護佐丸城の南麓山頂近くにあります。取り付け道路は何もない山の中にあります。ハブもいっぱい生息しているジャングルの中です。建築（一八五九年、安政六年、墓標確認）よりすでに150年の歳月を経ています。

今次大戦にても砲撃からも幸いにも免かれて無傷であったが、墓苑はすっかり荒れ果て雑木雑草が生い茂り、石垣は崩れ落ち沖縄版アンコールワットと言った感じで鎮座していました。この古墓を何とか改修すべく、これは私生涯の最大の責務と考えました。それは私が宗家祭礼代行の一人であるとされたからです。大変な役目を背負わされました。これが又大変なことになりました。全一族に呼び掛けるのですが、その名前も住所も解からずこれを伝達する事が大変な苦労でありました。募金のむつかしさは前題にも書きました如く骨の髄まで沁みこんでいるはずなのに又々同じ事を始めてしまいました。全工費の三分の二は私と実弟と従弟の三名で負担する事になりました。残りの三分の一をやっとの思いで募金で充填することになりました。誠にきびしく、すさまじい現実を知りました。拝所拝殿はすべて鋼鉄で作り放火、失火にそなえました。又鳥居も取り付け二基の龍柱を最前面に押し出してお宮、神社風に造り替えて一族の心のシンボルとしたのです。一大出費ではありましたがやっとの想いでこれを完成させることが出来ました。一族親族の協力に大感謝することは勿論であります。私は精神面で充実感、達成感を得て生涯を終えられればと思いますと今幸せな気分になっています。他人の業績を羨んだり気にすることもなくなりました。

七十才代の私は墓造りで終始した様です、体調も余り芳しくないのですが何か安定満足感で毎日働いています。死後に極楽浄土があるとすればそこに一時なりとも入居させてもらえば有難いことと願っています。千の風にのって広い大空を飛び廻るのも良いかも知れませんが私は吾が家の仏壇にこそ魂は居り度いし、庭は別荘、墓は故人（私）のお荷物（お骨）を納めるお蔵と認識しています。

昔からこの世の中で蔵というのは丈夫で耐火耐震性に優れて造られて大事なものを納め保管する所と決っています。この世で蔵を建てるという事は人生での立身出世成功栄達の代名詞のようなものだそうです。私もこの世の中での蔵を建てたかったのですが残念、あの世での蔵ばかり造って来ました。

私の話はこれで終わりです。読んでいただき有難うございました。

原稿募集！

随筆のコーナー（2,500字以内）

随時、募集いたします。日常診療のエピソード、青春の思い出、一枚の写真、趣味などのほか、紀行文、特技、書評など、お気軽に御寄稿下さい。

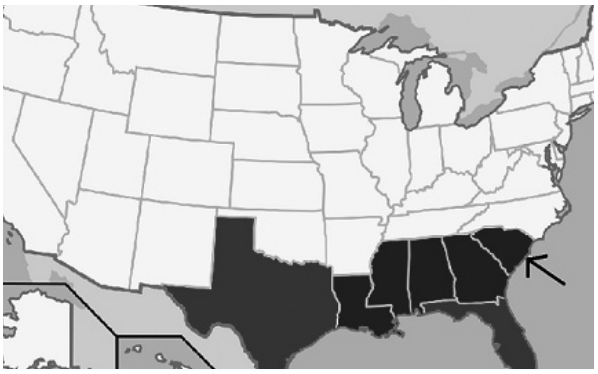
随筆

アメリカ Deep Southでの4年間

沖縄県立南部医療センター・
こども医療センター 産婦人科
大橋　容子

このたびご指名を頂きましたので、私が沖縄に移住する前に住んでいたアメリカ南部での4年間のことを書かせていただきます。

沖縄にはアメリカでレジデントやフェローを経験された医師が多いと思いますが、NYやカリフォルニアへ行かれた方が多いのではないでしょうか。私はアメリカの南部、その中でもDeep South、Old Southと呼ばれる地域に住んでいました。おそらく、その他のアメリカとは異質な歴史と文化をもつ地域だと思います。今回はその経験を書かせていただきます。



矢印がサウスカロライナ州です。「風とともに去りぬ」に出てくるアトランタとチャールストンの間に、私のいた州都のコロンビアがあります。南北戦争で徹底的に破壊された町だけど、まだ勝負はつかず今は休戦してるだけ、と言っている夫はここの出身です。

私が働いていた病院はアメリカのサウスカロライナ州にある州立病院でした。州立病院なのでアメリカ社会の最下層の人が来ますが、南部なので黒人が多く、患者の80％はMedicaidの黒人で、残りの20％はメキシコからの不法移民でした。とても大きな病院で、現在私が働いている南部医療センター・こども医療センター程の建物が10棟以上、広大な敷地にありました。ED（Emergency Department）は、子供用、外傷用、精神疾患用、というふうに部屋が10室くらいに分かれていました。なのでER担当医から呼ばれる時は「患者は6Podの15Bedだよ」と言われて、それを覚えておかないと迷子になりました。その広い敷地中でも、EDは治安の悪い地区に面していました。一般的に治安の悪い地域で働く救急専門医は腕がいいと言われます。有名な「ER」のモデル病院はシカゴのCook County Hospitalですが、私もレジデントの面接を受けるために同病院の前まで行ったことがありました。しかし、あまりに雰囲気が悪そうだと夫（生まれも育ちもアメリカ南部）が猛反対して、結局面接をキャンセルし、かわりにシカゴのフィールド博物館を観光して帰ってきました。ただ、Cook County Hospital程ではないですが、サウスカロライナ州立病院もいわゆる公立の病院でした。なぜ私がそこへ就職したかというと、夫の職場が近くだったことと、今までそこの産婦人科で研究留学しながらも臨床もけっこう参加させてもらっていたからです。私は当時、日本で産婦人科専門医も取得していましたが、AIDsの妊婦やドラッグ中毒や囚人の妊婦など、毎日新しい経験ばかりでした。

ある日のこと、やけに頻脈の妊婦が来て、胎児も頻脈で、頻脈なのに血圧も高く、体温は正常で、一体なんだろうと考えていると、上級医がすぐにコカインと見抜きました。慣れてくると、攻撃的な態度や鼻をすすったりするしぐさでわかるそうです。ちなみにうちの夫とデパートへ買いものに行った時、あるブティックの店員がトイレへ出たり入ったりしている様子を夫が見ていました。そして夫がレジで小声で彼女に指摘すると、値引きしてくれました（筆者はこの理由をあとで知りました）。

囚人も入院していましたが、部屋に銃を持った警官が24時間付きっきりでした。病院自体があまり治安のよくない地区にあり、朝は5時から出勤していましたが真っ暗でした。エスコー

トシステムがあって、呼べばセキュリティ・ガードが来て駐車場から病院まで一緒に歩いてくれるのですが、うちの夫が毎朝車で病院の前まで送ってくれました。アメリカへ来た当初、研究室の教授に、ペッパー・スプレーを持って歩けと言われたのですが、夫には、そんなもの私が使おうとしたって相手に取られて自分がスプレーされるだけだと一笑されました。それより、どうしても緊急で夜道など歩かなければならない時は、携帯電話で夫や友人に電話をかけながら歩くようにと言われました。そうすればもし何かあった場合でも手がかりがつかめるかもしれないし、相手も警戒して避けるかもしれないという理由です。ところで、医学生向けの産婦人科のレクチャーに、レイプされて後腟円蓋から腸が脱出しているのをどうやって再建するか、という講義がありました。よくもこんなに多くの写真が...（絶句）。ちなみに講師は、セントルイスから来た（美人でかっこいい）女性の産婦人科医で法律にも詳しかったです。その後犯人がどうなったかも把握されていました。

メキシコからの不法移民はスペイン語しか話せないので、病院が通訳を雇っていました。最初は通訳を火曜日だけ雇っていたので、火曜日にメキシコ人を集めていました。そうしたら人種隔離だ、と患者からクレームが来て、結局毎日通訳を雇うことになっていました。通訳のお金はもちろん病院もちなので、主任教授はうんざりしていました。ちなみに、妊婦たちは分娩予定日近くなると国境を越えてやって来ました。そしてアメリカで出産して、子供が成人して市民権をとるのを待ち、その子供にスポンサーになってもらい永住権をとるそうです。なので、無事出産した若いメキシコ人のカップルは本当に嬉しそうでした。そして、どこからともなく大家族が面会に来ていました。

人種に関することは、南部なので非常にピリピリしていて、誰も表立ってそのことを口にしませんでした。けれど、働きもせず福祉だけで生活している患者があまりに多いので、ひとごとながら心配でした。そういう人ほどまた子供を多く産みます。その子供もまた福祉だけで生きていくのでしょう。そのためなのかはわかりませんが、Medicaidは避妊手術もカバーしていました。少子化の日本では考えられないことですが、州立病院のレジデントはしょっちゅう避妊手術をしていました。一方、キリスト教色の強いところで、中絶は一件も経験しませんでした。たとえ胎児に先天的な異常があっても、養子にもらいたいという人もいました。キリスト教のそのようなところはすばらしいと思いますが、生まれたての男の子に割礼手術をするのだけはとても苦痛でした。たしかに衛生的にいいことだとは思いますが、泣き叫ぶ子をくくりつけて割礼するのは私には耐えられなかったです。が、それは産婦人科レジデントのルーチンでしたので、私は、どんなに重症患者が来てもいいから男の子だけは生まれないでくれー、といつも願っていました。ちなみに、割礼はエジプト発祥だそうで、イスラムやユダヤ教圏でもされています。

その後私はレジデントを中退して日本に帰ってきました。できれば日本の妊婦のために働きたいと思いました。その際アメリカ人の夫が、行くなら沖縄との条件だったので、私達は生まれて初めて沖縄に来ました。何かを期待して来たわけではなく、日本語が通じるだけでもストレスが減るだろう... と思って来たのですが、以来6年の歳月がたちました。周産期医療は日本の方がいいとかアメリカがいいとかの比較の問題ではなく、その土地の自然や習慣に根付いたものが最良であると思っています。先祖を大事にして家族のつながりの強い沖縄では、沖縄の風土にあった周産期医療があるのだと思います。効率を重視するアメリカや内地の医療から少し距離を置いて、地元の患者さんやその家族と交流しながら、沖縄にあったやり方を考えて行きたいと思っています。これからはずっとここでがんばりたいと思います。宜しくお願い致します。